勤労としてのボランティア

近　藤　良　樹

1．ボランティアとは何か

近年、わが国でも、ボランティア活動が活発になり、このことばが日常的に使用されるようになっている。「無料の奉仕」と解されるのがふつうであろうが、「無料」の「奉仕」ということだけでもなさそうである。徹底的に無償の奉仕・献身である主婦の家事労働はボランティアとはいわない。あるいは、戦争などに際しての強制的な無料の奉仕活動も、無理やりなものとしては、ボランティアとは見なさない。では、われわれの了解しているボランティアとは、なになのであろうか。

まず、「無料」（無報酬・無給）であることがひとつの特徴であるのは確かである。公民館から「ボランティアで講師をやってください」といわれるとき、依頼者においても、引き受けるものにおいても、このことばは、もっぱら謝金のないことを、「無報酬」であることを意味しているのである。だが、その活動が自分の意志に反して強制されるものであった場合、いくら無報酬であっても、ボランティアとはいわない。ボランティアは、voluntas（自由意志）に基づくものとして、奉仕する者の自発的な自由意志が大切になるもののように思われる。

ボランティアは、無給で、当人の自由意志で自発的に参加したものということになる。しかし、その活動が抗議行動・デモへの参加とか、あそび・行楽のたぐいになった場合、これは一般的にはボランティアとはいわないのではないか。ボランティアは、「勤労」の奉仕でなくてはならないのであろう。あるいは、また、「うち」のものに奉仕してもボランティアといわないのみか、さら

には、信者が自分たちの本部・本山で勤労奉仕するときとか、恵まれたものへの貢ぎの活動など、奉仕させてもらい、貢がせてもらっているようなところでも、ボランティアはいいにくいように思われる。つまり、その奉仕の対象は、家族外の、恵まれていない状態等にあって報酬をだすことが困難なものというのが基本になるのでもあろう。

ということであれば、ボランティアとは、あたかも家族にするときのように家族外の社会に対して無償の愛をもって接するもので、「個人の自発性に基づいた、無報酬での、勤労をもってする、対社会的な援助活動」ぐらいに定義しておいてよいであろうか。しかし、これは、ボランティアのひとつの理想型であって、これからかなりずれたものもしばしばボランティアと呼ばれている。「はげあたま」のように、毛髪の一本も残されていないものを典型・理想型にして、髪がけっこう残っていても、それに近似的な頭は、すべて「はげあたま」というのと同じことである。われわれは、個人の自発性は全然なくても、無給の強制的な残業のとき「ボランティアさせられた」という。報酬・謝金が少々は出ていても、余暇にする自発的な勤労は、ボランティアという。とくに海外でのボランティアは、まるまる生活がこれに注がれることになるのだから、生活できるだけの「手当て」がどこかから出されるのがふつうであろう。

ボランティアという言葉は、これの盛んなアメリカの「volunteer」の輸入語になるのだろうが、では、その本国では一義的にはっきりした活動になっているのかというと、そうではなく、「“ボランティア”ということばに付されるその意味のかけはなれた多様さ」[1]がやはり問題となっているようである。ボランティア（volunteer）は、義勇兵・志願兵の意味をもつが（いまでもその 意味を含んでいるようで、筆者が volunteer の書名のつく本をさがしていたら 、いくつか義勇兵のものがあった）、現代のいわゆるボランティアは、それとはまったく異質であり、一方では「労働」だが他方では「レジャー活動」のようでもあって「根本的に不確かな社会的位置を占めている」[2]といわれている。また、別の者は、これを盲人のとらえる「象のようだ」[3]とも形容している。その牙に触ったものは、なめらかで鋭いと言い、尻尾に触ったものは、ロープのようだと言うように、ボランティアは、各人各様に理解されていると。似たような事情にあるものと思われる。

わが国には、ボランティアに近いことばとして「奉仕」「勤労奉仕」ということばがある。ボランティアは、「奉仕活動」であり、こう翻訳してもよさそうなのだが、そうしない。「奉仕活動」とは異なるものを、われわれは、片仮名の「ボランティア」にこめているということであろう。

たとえば、中学生たちが、無人駅の清掃の「奉仕活動」をしているというのと、その清掃の「ボランティア」をしているという場合の違いである。「奉仕活動」という場合、これは中学校とかその生徒会の決定として、駅利用の全生徒に分担して強制される感じがある。これに対して、「ボランティア」の場合、生徒の有志が個人として自発的に参加しているものと感じられる。「奉仕」は、人であれ神のようなものであれ自分たちを支配したり上位に存在するものに、「仕え」「奉（たてまつ）る」ということが、下位のものが上の者に貢ぐという感じが残る。しかも、その支配し上に位置するものは、国家などの自分の所属する全体であり「公」になり、滅私奉公になるのが一般的である。

だが、ボランティアの場合は、これまでは主として福祉関係の奉仕活動について使われ、その上下の関係は、逆になる。恵まれた者が恵まれない者に「奉仕」するのである。そのかかわりは、仕え奉る上への関わりとは逆で、下へのかかわりになる。もちろん、この上下は、主として経済的なそれであり、人格的存在としては、現代のボランティアは、平等の精神にたつ。寄付行為とちがって、ボランティアは、恵まれない者のところまで降りていって直接手を握ろうというのである。人間愛に発するものとして、対等のかかわりとなることが求められる。しかも、ひとつの全体が全員でではなく、自由意志で自発的に個人が参加するのであり、奉仕する対象も、福祉の場合は、全体へ公のためにというよりは、恵まれない各個人に対してである。

奉仕活動といわず、ボランティアという場合、そういう個人主義的なかかわりがふまえられているのであり、対等の人間関係と自発性がそこで強調されることになっているといってよいのであろう。以下においては、この個人主義的

民主主義的な前提をもち、無償・自発性・勤労等の特徴からなるボランティアについて、本稿では、その勤労という特徴からこれを見ていくことにしたい。

2．ボランティアは、勤労での奉仕である

無料だといっても、物品を無料で奉仕する場合は、ボランティアとはいわないであろう。ボランティアでは、参加者の心身をもっての活動がささげられるのであり、しかも、その活動は、いわゆる「労働」になるのが基本であろう。同じような無報酬の自発的活動であっても、たとえば、環境問題に取り組む人たちが、炎天下を汗だくになりながらデモをしても、一般的には、「ボランティアに参加した」とはいわないであろうが、役所にお膳立てしてもらってピクニック気分であっても林業労働に含まれる「植樹」に参加した場合は、「ボランティアをした」という。生産加工の労働であったり、人に対するサービス労働といった「勤労」がボランティア活動になるのである。つまりは、賃金労働者の労働になるようなものが、その同じものを無料・無償でするのがボランティアの活動になるのであろう。

しかし、ボランティアの活動に、デモのようなものを含ませる者もある。ボランティアという言葉が（米国産の）ブランデーとまちがわれたりして、まだ「注」を必要とした早い時期からボランティアの名で活動している、したがってこの言葉におそらく一番なれ親しんでいる「大阪ボランティア協会」編の「ボランティア・ハンドブック」は、「1989年６月、天安門広場に集まった学生は、まさにボランティアとして自由な社会を求める行動に出」[4]たのだと、デモなどもボランティアにいれている。「市民運動といえば抵抗的・運動的で、ボランティア活動はサービス中心のものという受けとめ方がありますが、両者は本質的に同じものです」[5]という。「ボランティア活動は、単なる善意や奉仕の活動から脱却し、人権意識の人間連帯思想に根ざした幅広い市民運動化の傾向を見せつつあります」[6]との認識からのことである。

そうはいわれても、革命的な市民運動・デモなどと対立するかたちの、保守的改良主義的運動としてボランティアがみられていた頃の記憶がふっきれないからであろうか、市民運動とボランティアをひとつにするのには、筆者などにはなお抵抗がある。しかし、時代が共産主義革命の（市民）運動を無意味化した現在は、ボランティアと市民運動とをことさらに区別することはないというのが、つまりボランティアは、単に奉仕するにとどまらず、社会構造そのものにも目を向けて発言していき社会改革・市民運動にまで結びついていく積極的なものというのが、時代の趨勢になってきているのかもしれない。

（寄付行為とボランティア）　ところで、恵まれない人に善意の志を贈与する場合、一方には、お金とか物を贈与する「寄付」行為があり、他方には、勤労・労働そのものの奉仕がある。後者がボランティアになるわけだが、前者と区別しにくいこともある。医療ボランティアでは、薬などの物も同時に贈与することになるであろうから、そのボランティア活動には、物の贈与も含まれるのが普通となる。岡本包治は、ボランティアを定義するとき「各人が持っている能力、労力、自由な時間あるいは財産（金銭や品物、その他建造物など）を社会に役立てる活動」[7]という。「労力」のみではなく「金銭や品物」を役立てる行為もボランティアの内容に含めている。たしかに、両者を切り離すことは、不自然で、とくにボランティアの受手にとっては、ボランティアの医者から薬をもらい、ボランティアの主婦からお弁当をもらうのであって、ボランティアの活動は、物の贈与・寄付と一つになっているのである。あるいは、労働を提供していても、お金がなくなれば、そのボランティア活動はストップする。地域の独居老人に弁当をと、ボランティア活動をはじめても、資金が底をつくとそれで中止となってしまう。ボランティア活動には、金品の提供も同時に含まれているのでなくては、持続したボランティアとしては成立しにくくなる。

だが、寄付行為と勤労の奉仕は、贈与するものの中身が一方は、労働の対象化され結晶した価値物であるのに対して、他方は、生きた労働そのものであり、物と人の違いであって、寄付なくしてボランティアが存続しえないのは確かだが（受手には一つになっているとしても）、厳密には、やはり区別されるべきであろう。

寄付においては、「恵んでやるのだ」という尊大な気持ち・優越感をいだきながらにすることがあろう。恵まれないもののところまで降りてきて、というのではなく、高いところから、お金をなげいれるということがある（だが、お金には、そういう傲慢な顔は描かれないので、受け取る方は、そのことをさしあたりは知らないですむ。お金のありがたいところである。その点、古着などの品物の場合は、ときにその提供者のこころが見えるようなことになり、受け取るものの心を傷つけることも生じる）。しかし、寄付行為とちがって、ボランティアの勤労奉仕では、奉仕しようというものは、お高くとまっているわけにはいかない。恵まれない者がいるところまで自分自身を降ろしていく必要がある。階級的差別意識の強かった古い時代のボランティアはいざ知らず、今日のボランティアは、対等な人間関係にもとづき、ボランティアの受手と人間同士のふれあいをもつ。そういうことをはじめとして、勤労としてのボランティアでは、多様な人間関係のなかに組み込まれて、悲喜こもごもとなる。寄付では、「あのお金はどこへいったのだろう」ということになる場合があるが、ボランティアは、当人が直接出向くのだから確実で手応えあるものとなりうる。

勤労・労働は、ふるくなるほど、下賤なものと見なされていた。今日ボランティアの盛んに行なわれている欧米では、（そのキリスト教が宗教改革のもとで労働（職業（Beruf）＝使命（vocatio）＝聖職（vocatio））を神より与えられたもので神聖と解釈していったけれども）、われわれに比べ、労働の蔑視が強くつづいていた。最近まで、イギリスでは労働者と有産者たちは席を同じうせずと、酒場にも仕切りがあった。ボランティアは、寄付と異なって、この労働蔑視を打ち砕くのでなくてはならない。有産者が酒場の仕切りをそのままに、恵まれないものにお金をなげわたすことでも可能になる寄付とちがって、勤労としてのボランティアでは、仕切りを自分自身が越えて、恵まれないもののところへいき、いわば有閑・有産の者が労働者となって、労働を贈与するのである。勤労としてのボランティアを決意するものは、自分のかかわる労働を贈与にあたいする尊いものとみなしていなくてはならないであろう。

だが、資本制下の労働者自身は、しばしば自分たちの労働を聖職どころか苦役ととらえ、自己疎外されたものとみなしている。労働は、お金を得るための単なる手段であって、できるものなら、疎外された労働などにつかないで暮らせることを望む。下賤なものとは思わないにしても、できれば避けたいと思っていることがある。これに対して、ボランティアは、自らが苦しい労働を無償でわが身に背負うのであって、そのかぎりでは、ボランティアするものの気が知れないという声もでてくる。

3．具体的労働としてのボランティア

ボランティアは、勤労の奉仕だが、同じ労働・勤労とはいっても、どうも、そこにおいて注目されるもの、目的となるものは通常の賃金労働とは異なっているようである。賃金労働についてマルクスは、周知のように、これを「抽象的人間的労働 abstrakt menschliche Arbeit」と、「具体的有用労働 konkrete nuetzliche Arbeit」の二面からとらえ、後者は、なにを生産するかというような、具体的な有用性（「使用価値」の創造）から見られた労働（work）であるのに対して、前者は、それを捨象したすべての人間労働に共通の単なる心身の生産的な（経済的な「価値」創造の）働き（labour）であって、基本的に時間で計られるもので、賃金労働者は、この抽象的人間的労働を売っているのだと捉えた[8)]。この二つの労働のあり方からいうと、ボランティアのばあいは、賃金労働者とちがって、抽象的人間的労働にではなく、各具体的有用労働にもっぱら注目して、この有用労働をささげているのである。

同じ家事労働であっても、家政婦は、その有用労働の内容には無頓着で、labour＝抽象的労働を時間を単位にして売っているのに対して、主婦は、具体的な個々の work＝有用労働にもっぱら注目して、これを家族にささげているのである。ボランティアは、この主婦の勤労の姿勢に等しいといえよう。ただし、その具体的労働の贈与が家族であるばあいは、ちょうど賃金労働者が家庭に賃金のほとんどを渡してもそれを「寄付」とか「献金」などとはいわないように、ボランティアとはいわない。その贈与の相手は、あかの他人であるのが、ボランティアのボランティアたるところである。

賃金労働者は、その雇用されての労働のもとでは、しばしば疎外感をいだく。抽象的労働に対して賃金が支払われるにしても、当然、有用な商品を生み出すのであって具体的有用労働の側面をもっているが、その有用労働は、労働するものが自律的に支配し自由にしているのではなく、雇用主の支配するものになっており、いやな品物の生産やサービスにも従事しなくてはならない。そうなると、せっかく有用な労働をしていても、自己は主体的には参加することはできず、疎外感をいだくことになる。それをがまんさせるのは、抽象的労働の賃金である。

ボランティアは、この点でいうと、その労働をだれかに売って、その雇用主の支配下にはいるのではなく、自己自身が直接、その有用な具体的労働を支配しつつ、自由に労働するのである。賃金などを超越して、自己の創造的能力をみたし、充実した生をそこに展開し、社会的に貢献して満足することができるのである。

（福祉活動が中心だが…）　ボランティアは、具体的有用労働を贈与しようというのだが、贈与には、その受手があり、それを望んでいるのでなくてはならないであろうから、どんな労働でもいいというわけにはいかない。援助を求めるのは、社会的に恵まれていないひとびとということであり、これまでのボランティアは、なんといってもそういう人々へと向かい、福祉関係の仕事になるのがふつうであった。ボランティアの具体的労働とは、福祉活動という具体性・有用性になっていた。

福祉、つまり、健やかで安定した社会的生活ができるようにと（そうできていないひとびとを）援助するのが、いまでもおそらくボランティア活動の中心になる。無償での援助活動としてのボランティアは、有償でサービスを買うことのできない貧困で恵まれないひとびとのために注がれてきたのである。ということで、ボランティアには「自発性・福祉性・無償性、この三つの性格がある」[9]というようなことになり、ボランティアの勤労は、単なる勤労・労働ではなく、もっと限定して「福祉」のための勤労奉仕と解されることになっていた。たしかに、かつては、ボランティアといえば、福祉の活動であり、いまでも、わが国では、恒常的に営まれているものとしては、多くはそうだといってよい。

しかし、最近は、各種の催物にはボランティアがつきもので、また、教育の場面でもボランティアが盛んであり、商店街の手伝い・通訳・観光案内のボランティア等もいわれて、福祉には限定されないものとなっている。ひいては福祉に限定すると問題も出て来るようになっているようで、たとえば、生涯学習のボランティアという方面から岡本包治は、「ボランティアを福祉に限定する見方が、いま生涯学習の発展を邪魔しているといってもよい」[10]と発言している。彼は、「福祉性」よりもひろくして「社会の発展に役立つ」こととしての「公益性」[11]をあげている。ボランティアは、わが国でも、もう福祉活動の枠をこえて大きく広がっているのである。福祉にかぎらず、何であれ援助を求めているものに対して自発的に勤労を贈与・奉仕するものは、一般的に、ボランティアになるといっておいてよいのではなかろうかと筆者も思う。

4．補完し先駆するボランティア

（尻ぬぐいのボランティア）　資本制下の企業は、市民に必要であっても、もうけにならないものにはかかわらない。国とか自治体がそれについては責任をもつことになるが、それでも、なかなかサービスは、予算の問題もあって、行き届きにくい。その「すきま」というか、きめ細かなところは、さしあたりは、縁者が援助したり、ボランティアあたりがうめていく以外ないのである。あるいは、大きな災害などで緊急で大量の労働が必要となるようなとき、購買能力も低くなり、かつ必要な労働力もその組織も身近には存在しないようなことになって、緊急のまにあわせには、こまわりのきく、意欲をもった個人からなるボランティアがかけつけて有効に働くことができる。

だが、このような補完・穴埋め・急場しのぎのボランティアは、場合によっては、抜本的な対策を遅らせたり、怠慢をささえてしまうものとなる可能性もある。地域の老人の介護のボランティアに献身している高林澄子は、「看護ボランティアの活動が、政治の矛盾を曖昧にしたり、行政の不備を補うばかりに

活用されるものであってはならない」[12]と釘をさしているが、それでも、介護ボランティアに対して「ボランティア活動が安上がり福祉の片棒をかついでいる」[13]と冷ややかに見られることがあるという。独居老人の世話はだれかがしていかなくてはならないが、ボランティアが安易にこれを引き受けてしまうことで、当の自治体がそ知らぬ顔をしてすませることがある。デモもボランティアに含めている「大阪ボランティア協会」のように、「奉仕の活動から脱却し…市民運動化」[14]していくことなど抜本的対策にも同時に気を配らなくては、ボランティアの善意は、資本や国家にたんに利用されるだけのものになる可能性があるのである。ボランティアの盛んなアメリカでも、この点は、ボランティア批判の代表的な意見になるようで、ハータ・ローザは、「ボランティアが有能であればあるほど…社会構造上の基本的な欠陥を温存することになる、という批判」[15]があるといい、ボランティア活動は、そうならないようにと「社会変革も志向しなければならない」[16]と主張している。

（先駆し、資本制を超越するボランティア）　ボランティアは、資本制の矛盾・しわよせの補修・尻ぬぐい、公的機関の不備の穴埋めとしてあるだけではない。むしろ逆に、「はじめにボランティアありき In the beginning there were volunteers」[17]だといわれることもある。先立つのが先駆性がボランティアの特徴になるというのである。

資本制が企業化しえていないもので、しかも、公的機関もこれができていないようなものにとボランティアは取り組むのである。行政機関としてはそこまでやる必要がないと考えているものには、公的な資金は出ず、当然そのような公的な活動は存在しえない。そういう先駆的なものになる可能性をもつ活動は、さしあたりは、有志のボランティアによる以外なくなるのである。老人の介護は、もうけにならないから、選挙の票にならないし予算がないからと、資本も国も取り組まなかった。家族まかせであった。社会的には、まずボランティアがはじめてこれに取り組んでいったのである。

アメリカの西部劇によくでてくる一こまに、逃げた殺人犯を捕まえるために町民の有志をつのり、この勇敢なボランティアたちが追跡していくというのがある。無法者がときたま出てきて、これを捕まえるのも、年に一二回というのなら、有志がボランティアで集まればよい。だが、町が大きくなって無法者が毎日のように手をかけるようになると、常勤で有給の警察官を必要とするようになっていく。まずは、ボランティアが先駆するというわけである。

あるいは、ボランティアは、資本制のもとで成立しているものだが、無給を中心としてこれを超越している面をもつ。あらゆるものをお金に還元していこうというのが資本主義であろうが、そう仕切れないものがある。いくら購買能力があっても、お金で手に入れることのできないものがある。たとえば、ボランティアするものの基本姿勢でもあろう「人の真心」は、売買できるようなものではなく、これを超越したものであろう。やさしい人間の心に飢えた老資産家が、面従腹背の使用人たちに絶望して、その介護を、下手で頼りないけれども人間愛なくしては成立しえないボランティアに求めるということがありうる。

5．博愛的なボランティア労働

ボランティアは、いうなら只働きである。賃金労働の場合、それがやすくなるほど、労働者は、やる気をなくし、その労働にぞんざいになり、手抜きをしていくことになろう。だが、ボランティアは、只働きであるにもかかわらず、ぞんざいにもならないし手抜きなどもしないのである。それは、ひとつには「被雇用者は、お金のために働くが、ボランティアは、愛のために働く」[18]からである。

ボランティアは、利他主義者・博愛主義者である。惻隠の情にあふれているのである。冷淡なひとは、「貧困は、自由社会では、自分たちの責任だ、この世界は弱肉強食なのであって、無償の援助など依存心を強くし自立をさまたげ、あるいは子沢山にして一層貧困を拡大させるだけだ」等と突放す。だが、ボランティアしようというような者は、ひとは弱肉強食の動物ではないと考える。自分たちは、たまたま恵まれた状態におかれているだけで、運悪く恵まれず非人間的にしか生存できない人間のいることにじっとしておれないのである。人間愛にもえるのである。ボランティアは、その恵まれない者のところまで降り

ていって働くのであり、平等の精神にたっての博愛主義者になるといってよいのであろう。

サービス労働していると、当然、不服をいわれることもあろう。それを耐えさせるのは、賃金労働では、「お金」である。ボランティアは、その愛がこれを耐えさせるのである。厳しい労働に、やめたくなることもしばしばであろう。それを持続させるのは、賃金労働では、お金である。ボランティアは、ふとそう思いながら、その慈愛のこころが、これを持続させていくのである。

（コスモポリタンとしてのボランティア）　ボランティアが「無報酬」であるとは、通常ならば報酬を出すべきだということが前提になっているわけで、本来的にはその勤労・サービスを、お金をだして購入するような、あかの他人の間柄になることがふまえられているのである。ボランティアがその労働を贈与する相手は、家族とか、親戚のような「うち」のひとではなく（そういうばあいはボランティアとはいえない）、そとのあかの他人やその集合体になるのである。このあかの他人に、あたかも自分の家族にするように、無償で献身的に愛を注ごうというのがボランティア精神であろう。しかも、この外の人々については、民族とか国家にしばられないのであって、助けをもとめているものならばだれでも、それこそ地の果てにまでかけつけていこうという姿勢をもっているのである。博愛主義者でありコスモポリタンである。「うち」では自然生的な愛が支配的であるが、外には、この愛はふつう注がれない。この愛をそとに注ぐ利他・愛他にボランティアが成立するのである。

とはいえ、日常的なボランティアは、仕事のあいま・余暇にするものとしては、身近な、自分をとりかこむ共同体・コミュニティーなどに奉仕するものが多くなる。また、アメリカのような、ボランティアが多彩で日常生活の一部をなしているところでは、職業訓練のつもりであったりレジャー活動と感じたりして、人間愛だ博愛だというあらたまった意識なくして、それは存在する。理念としてのボランティアは、地の果ての未知の人にまで愛をそそごうというものだろうが、現実のそれは、もっと身近なところに見いだされるのがふつうである。ただし、身近すぎるのではいけない。その限界ははっきりしている。自分の家庭・血縁という「うち」には、つまり、ボランティアの特徴の中心をなす「無給の自発的な勤労」や「贈与」「愛」が本来の関係を構成しているところには、ボランティアは存在しないということである。

6．余暇の自由で充実した労働

（余暇の善用）　ボランティアは愛が作り出す。だが、それを現実のものとするには、暇がなくてはならない。休みなく賃金労働をして生活を支える必要のあるところでは、他人に労働をさく余裕はなく、ボランティアどころではない。ということは、ボランティア活動には、余裕・暇があり、生活がべつのところに確保されているということが前提になる。余裕がなくては、ふつうには贈与は、できない。寄付は、お金の余裕があればできる。だが、ボランティアは、いくら金持ちであっても、時間の余裕がなくてはできない。ボランティアできるのは、時間的余裕のある者ということで、ボランティアというと主婦であり、最近は定年退職者のボランティアがしばしば話題になる。もちろん、ひまは、現代の労働者・勤労者には、十分あり、ボランティアの余裕はあって、ときには、ボランティアへの参加を有給のままに認め、これをすすめる組織もでてきていて、余暇・休暇の活用がなされはじめている。

余暇は、自分の自由につかえる気楽な時間であるが、これは、まずふつうには、消費活動につかわれる。遊びであり、娯楽の時間となる。趣味もそこにある。趣味は、自分の楽しみであり、多くは消費的であるが、そのなかには生産的創造的なものもはいり、ときには、ボランティアを自分の趣味とするひともいる。余暇の自分の自由な時間と、うちでは自然生的な無償の愛とが、外の他者にとふりむけられて、ボランティアという利他的な生産的活動を生み出していくのである。

（「ぜいたくな」自由な労働）　ふつうの労働者においては、その生産物とかサービスのもつ社会的な意義などはあまり問題にされないのに対して、ボランティアでは、これが常に確認される。その個々の勤労が意義深いことを確認して、これを自分のボランティアとして引き受けているのである。ひとの引き受

けたがらないような汚い仕事は、賃金労働者の場合、高額にされた賃金という魅力においてひきうけるのであるが、ボランティアの場合、それをなすことが社会的に不可欠の十分な意義をもっていることを確認し納得してのみ、引き受けるのである。ぜいたくな労働ともいえる。やる意味・意義があると思うもののみを引き受ける、自己実現としての自由そのものの労働である。

募集されるボランティアの場合、したい仕事と求められている仕事にすこしのずれがあるのは仕方がないが、それでも、自分の気に入らないもの、やる必要がないと自分が判断したものは、やってほしいと要求があったとしても、やらない、参加しない。それを強制することなどボランティアである以上、できないのである。ボランティアは、だれにも縛られず強制されることなく、有益・有用だと自覚できる自分の気に入った労働に自主的に参加するのである。

自主的に参加するものとしては、ときには、自分だけの判断で自分だけでやるから（新しいボランティアの開拓は、ひとりとか少数ではじまるのは確かだが）、その自称のボランティアは、社会的にはかならずしも有益ではないものもあらわれることになる。老人が自分の判断で地域の道路とか公園を掃除しているのは、社会的に有益であるが、素人判断で公園の木々を剪定するなどになると、めいわく・有害となるばあいもある。

（充実感・満足感）　賃金労働であっても、具体的有用労働の面において、この労働が生きがいとなっていることもしばしばである。だが、生きがいなどはなくても、苦痛であっても、疎外感にさいなまれているとしても賃金に見合うことはしなくてはならない。その点、ボランティアの勤労は、本人の納得のいくもので充実感のいだけるものが基本である。しかも、それを贈与するということで、贈与の喜び（贈られる者の喜びを喜ぶのである）が大きな魅力となっているのである。

満足・充実ということでは、ボランティアで社会的な生きがいの見いだされることがある。定年退職者は、社会的存在としての自分を喪失しがちとなる。社会的な組織の一員として労働することにおいて、自分の存在の意味を見いだしていたのが、それがなくなってしまうのである。ボランティアに参加して、

自分を生かせるなら、それは、無報酬であっても、自分の存在が必要とされているということで充実した生を維持できることになるのである。

主婦の場合、うちにとじこもっていると、社会的には孤立し孤独となる。社会的、社交的存在である人間は、金銭的にはめぐまれて消費生活は充足していたとしても、空虚さを感じることになる。ボランティアは、これを充足してくれるものになる。自分の存在の社会的意味を見いだすことが可能となるのである。ただし、社交性・社会性の欲求は、被雇用においても満たされる。最近、アメリカでは、主婦は、有償でフルタイムの勤めに出だして、ボランティアにたのみにくくなっていて、老人をあてにするようになっているとかいう[19)]。ボランティアよりは、企業などで働く方が、責任をもち組織を動かし等と生きがいも大きくなる可能性がある。社会性欲求はかならずしもボランティアで満たされる必要はないのではある。

7．結び（ボランティア労働の諸問題）

（頼りなさ）　賃金労働の場合は、賃金に見合う仕事をしなくてはならないが、その点からは、ボランティアは、無給なのだから、気楽ということになる。専門職のひとが、あるいはその退職者などがその専門でボランティア活動するばあいは、しっかりしたものになるが、それでも、有償ということでの責任はないとなれば、ぞんざいになる可能性がなくはない。ましてや、その仕事については素人であるひとがボランティアとしてそれにかかわるばあい、善意の情熱では通常の賃金労働者にまさるとしても、仕事のレベルは、かなり低いものにとどまることになる。あるいは、自由意志で参加しているのであれば、自由にやめていくことも阻止しにくく、無責任で、頼りにならないものとなる危険性もひそんでいる。

（効率の低さ）　雇用労働者の場合、有機的に組織されて、職階制をとったりして、高度な組織的な活動をすることができる。だが、ボランティアでは、それは、簡単ではない。任意に集まり、自由に抜けていき、自発的自主的に参加しているだけであれば、恒常的な有機的組織は形成しにくい。中心になるもの

が命令するとしても、自分の意志にしたがって参加・不参加を決定するのであれば、その拘束力は、弱くなり、組織としての力は発揮しにくいものとなる。つまり、人数のわりには効率がよくないということになるのである。

このことは、逆にプラスの面となることもある。雇用されたものの組織の場合、その命令・管理の系統が崩れたら動きがとれなくなるし、現場では、組織の決定を待って等ということで速効速戦性に欠けがちとなるが、ボランティアのばあい、命令されてということはあまりなく、個々人が自分の活動について自主的自律的に判断する部分が大きく、動きやすく臨機応変・速戦性に富むといえそうである。

（お金とボランティアのどちらがいい？）　ボランティアは、勤労の奉仕である。寄付行為とともに善意の援助活動を形成している。前者では、自分の存在そのもの・活動自体をささげているものとして、その姿勢の点では、単なる寄付行為よりは、徹底したものとみなすことができる。だが、寄付の方がいつも不徹底だとか意義が小さいとはいえないところがある。

贈与するものの方からいうと、勤労の奉仕としてのボランティアをするには、当然、時間的な余裕がなくてはならない。いくら愛にあふれていても、時間がなくては、ボランティアはできない。その人が社会的に多忙で重要な地位にあるばあい、ボランティアは、あまりできない。しかし、そういうひとは、ボランティアに時間をつかうよりは、その時間を仕事についやして、そのお金を寄付する方が贈与する経済的価値の点では、よほど大きなものになるはずである。現場＝ボランティアが十分に活動できるには、寄付などの後方の支援がしっかりしていなくてはならない。地道な後方支援に徹する方が困難なことがある。

贈与される側・受手からいうと、これまた、かならずしもボランティアの方がよいとはいえない。お金でかたがつけられるものの場合、その方がよいときもある。ボランティアしてもらう場合、無料なのだから不平は、あまりいえない。気に入らないひとがボランティアにくることを、無償で援助される者としてはむげには拒否できない。だが、お金で購買するのなら、気に入らない人はさっさと拒否できる。上手で確実な有償のサービスがあるのであれば、お金をもつ者は、その方を選択するであろう。とくに発展途上国のばあい、労働力は安価なので、医療活動などの特殊技能のボランティアでないのなら、先進国からの援助は寄付の方がありがたいということになる。そういう地域では失業も深刻なことがふつうで、ボランティアでは、失業者をふやしてもへらすことにはならないから、寄付の方が効果的な援助になる可能性があるのである。

註

1）Jone L. Pearce; *Volunteers-The Organizational Behavior Of Unpaid Workers*. 1993. p. 15.
2）*ibid*. p. 9.
3）*The Volunteer Management Handbook*. ed. by Tracy Daniel Connors. 1995. p. 5.
4）M. マグレガー等著『ボランティア・ガイドブック』（原題 *For Love not Money: A Handbook for Volunteers*. by M.McGregor. etc. 1982.）大阪ボランティア協会監修 小笠原慶彰監訳　誠信書房　1996年　188頁以下
5）同上書　193頁
6）同上書　193頁以下
7）岡本包治編著『これからの指導者・ボランティア』　ぎょうせい　平成５年　10頁
8）*Karl Marx・Friedrich Engels Werke*. Diez Verlag. Bd. 23. S. 56ff.
9）M.マグレガー等著『ボランティア・ガイドブック』大阪ボランティア協会監修 小笠原慶彰監訳　誠信書房　1996年　189頁
10）岡本包治編著『これからの指導者・ボランティア』　ぎょうせい　平成５年　17頁
11）同上書　10頁
12）高林澄子編著『専門職ボランティアの可能性と課題』　勁草書房　1990年　136頁
13）同上
14）M. マグレガー等著『ボランティア・ガイドブック』大阪ボランティア協会監修 小笠原慶彰監訳　誠信書房　1996年　193頁以下
15）ハータ・ローザ『女性の職業とボランティア活動』（原題 *Women, Work & Volunteering* by Herta Loeser. 1974）　柴田善守監訳　相川書房　1978年　39頁
16）同上書　40頁
17）Ivan H. Scheier; *Building Staff / Volunteer Relations*. 1993. p. 3.
18）Jone L. Pearce; *Volunteers-The Organizational Behavior Of Unpaid Workers*. 1993. p. 59.
19）cf. *The Older Volunteer An Annotated Bibliography*. compiled by C.N.Bull and N. D. Levine. p. xiii.

The volunteer as a work

Yoshiki KONDOH

The definition of volunteer is difficult; because people use this for different meanings. In Japan this word is used with 'katakana' "Borantia" for distinguishing from the traditional "Kinrou Houshi (unpaid labor service)". In Japanese case a volunteer has the character of autonomous voluntary individualism and democratic equality.

I will define the volunteer as the social activity of individuals with unpaid voluntary work. In this treatise I have picked up the volunteer as a work.

Generally speaking, "employees work for money and volunteers for love". Then the volunteer's appreciation of his work is different from employee. Employee's purpose is wage and his labor is estimated from the point of abstract simple human activity which can be measured by the time for wage. But volunteer's purpose is the giving for unhappy people and his work is estimated from the point of concrete useful activity.

The work of volunteer is unpaid. Sometimes this fact is criticized that it's only cheap repair or stopgap of capitalism's contradiction and defect. To respond to this critique volunteers must too struggle politically against the evil of capitalism or each government. But volunteer is not only the repair but also the pioneer who discovers and leads new useful social activity.

The work of volunteers is done at their free surplus times and is free, voluntary, agreeable and full activity. If their work is uncomfortable or empty, they can withdraw from it, for their work is unpaid. If they feel disagreeableness or compulsion, then they may stop their work, for no wage.